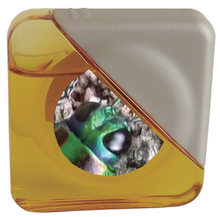
虚の筏（ソラのイカダ）27

洪水企画 2021.7.1
http://www.kozui.net

いち

酒見直子

のみこみがわるいのね
いちいっていちしかできない
いちいってはんぶんも
できないときもある
おはしもって
といったら
おはしだけもつ
にんじんたべて
といったら
にんじんだけたべる
だから
しかるの
そんなんじゃだめよ
しゃかいはきびしいんだから
いちいってじゅうくらいできなきゃ
「できるひと」になれないよって
でもね
あるときおもったの
このこは
いちのなかにたくさんのことを
みているんじゃないかって
おはしもつ　のなかに
にんじんたべる　なかに
わたしにはみえないものを
みているんじゃないかって
ひゃくいろめがねのように
かわりつづけるひとみをみて
おもったの
そしたら
もうなんにもいえないの



しずかさに

久野雅幸

満開となって
いまは
すべての花が
一本の木の花としてひとつになり
散り始めるまでの時間を
過ごしているばかりと思われる
さくらの木の
花のしずかさ

あまりのしずかさは
かえって
こちらに語りかけてくる

ただ黙っている者のしずかさと
死者のしずかさのように異なる
深いしずかさが
ここに
あるよ

草木のしずかさの中から
それは
別種のしずかさで語りかける
時がそこで止まっているかのような
しずかさに
おどろく

生きているものでも
あのようなしずかさをもつことができるのだ
夕方の薄暗がりの中に
さくらの花がとけこんでしまえば
さくらの花のしずかさと
夕方のしずかさとを
区別することはむずかしい

夕方のしずかさの中では
死者とすれ違っても
気づかないのかもしれない

夕方の人となって
さくらの木のとなりに立ったわたしに
さくらの木が語りかける

たたえられて
こぼさないようにしているものが
あなたにもありますか

もちろん　それは
生きているものの問いかけである

移動祝祭日の朝、

たなかあきみつ

頭脳は――空より広い――だから――
二つ並べれば――そこに空が入ってしまう
（エミリー・ディキンソン）

たとえば朝刊の経済面に点在する
空き地にころがる空缶もどき
《空室》なる文字を空欄の四辺のように
わざとかすめる天変地異の煮こごりの地図
チモールのゴリ付近を
赤道またぎに思わず滑走する極楽鳥の頸

眼下の頁に漂着した
絶望の断崖を解読できない絵手紙の差出人の
ハンストによる原因不明死に
接し、病状は未解読ながら
おのずとしばらく涙がとまらない
無数のコンマの連打と同じく、
薄青く灰色がかった窓から
いたたまれなく
《今日、私を連れて帰って》と――

たとえば
あの約束の場所へ
《月に行きたい》とうそぶきつづける
四月生まれの
宇宙飛行士ガガーリン少佐は
コスモス搭乗犬のように依然として行方不明、
ひからびたヒロイズムともども
波消しブロックの片隅に
溺死体が打上げられた

ブロッコリイを蒸かせばつややかな深緑
カンタータの放送開始を前に
独特の句切れで、着水する宇宙デブリのように
――伊豆諸島、夜、雷をともなって
雨、はげしく降るでしょう

［追伸］
表題の二週間後の脳裡には、BSプレミアムで放映された映画「聖の青春」に漂っていた、政治的ならざる主人公・聖（さとし）の病状の緊縛の冷気が焼きついた、画面の大阪環状線と海景もなんだか寒々としていた。

［補註］最後の2行は4月29日の午前6時頃のラジオの天気予報の聞き書き。

兄

小島きみ子

杜の入り口に
春祭りの幟旗が翻るとき
ヤマブキは　時間の光が　そこだけ止まって明るかった
野茨の茂みでは　ミツバチの羽音が　歓喜で溢れていた
真っ白なモクレンが咲いていて
兄は木に登り　小枝を手折ってくれた
杜は　リンゴの丘へ続き　桜の丘へ繋がり
丘の頂上には　戦没者の慰霊碑があった
東斜面には　先祖の墓が一族ごとに祀られていて
見事な枝垂れ桜が満開だった

大陸からの風が強い日
ドングリから発芽して三年目のクヌギの幼木が
若葉を茂らせて　風にそよぐ
まだ小さいけれど　弱いけれど
やわやわ　さわさわという木の声の
なんという明るさだろう

杜の入り口に
春祭りの幟旗が翻る
あれは　田植えが始まるという合図
郭公が朴の木の中で鳴く
朴葉寿司を作れという合図
一本の木のように生きている兄が
田圃に水を張る
青葉の影と　夕日の影と
鳥たちの影が
水の上の木の中に入って行く

かけら

生野　毅

ベランダを這いずり
よろけながらたちあがって
また仰向けにされ
喉もと　乳房　太股の内がわ　腋窩　首筋
冷凍庫の吊るし肉より冷えきっていたのに
両隣や向かいの家々　二階の斜め下の街路
いくつもの青黒い瞼が閉ざされ
いつしか　見渡す限り
家々のかけらというかけら
かけらの影という影ばかりなのに
あの夜　苦痛で凹む背中や腹のほの白さを
ほくそえんで眺めていたから
かけらにすらなれず
かけらを騙ってさまようう
償いのつぶやきは
広がる土のいたるところの窪みに
掃き寄せられるかけらにまぎれて
ときどき　かけらに躓くと
あの夜　ベランダのコンクリの床に
溜まり続けた嗚咽は
かけらとかけらの隙間で
わずかに　震えて

鳥と名を

海埜今日子

男と池の周りを歩いていた。「ああ、あれはキンクロハジロだ」という。黒白に金の目、鴨に似た鳥。それはわたしに語りかけるでもなく、自分に語りかけるでもなく、おそらく両方だった。水辺の鳥ばかりなのは、当時、一緒に出かけたところがそうだったからだろう。

その頃、わたしは鳥の名前をあまり知らなかった。だから男のことばで、目の前の鳥たちと名前が一致するのが、魔法のようで、心地よかった。男は小さな鳥の図鑑を携帯していた。彼もまた合わさるのを、口に出して確かめていたのだろう。鳥と名と書物、そして。

男と離れ、引っ越した先で、以前よりも鳥が気にかかるようになった。水辺があり、緑が比較的多い場所だからと思ったが、それだけだったか。名前たちが呼んでいる、読んでいる。合わさらないと、彼らを知らない。

だから一致するのは、いつもうれしい。わたしも鳥の図鑑を求めて、鳥たちを探した。いや、そこここにいる、名前を知らない、呼べない、彼らと近づきたかったのだ。

水辺をゆくコサギ、アオサギ、カワウ。マガモとカワセミは知っていた。人の家の庭にヒヨドリ、ムクドリ、たまにジョウビタキ。鳥と名と書物。ハトはドバトが正しい。

ハクセキレイは、かつて男に教えてもらった。空高く、鈴のように鳴いている鳥はなんだろう？　あれは白黒のシジュウカラ、子どもの頃、ウグイス色のメジロと共に家にいたっけ。鳥と名と書物と記憶、そうして？

ケ、キョ、ホ、キョ、鳴き声がたどたどしい春のウグイス。水に浮かぶカルガモが空を飛ぶと、いまだに驚いてしまう。今年もツバメが高架下に。記憶の水が、名前と姿を濡らすようです。図鑑は、写真より絵のほうが、特徴がわかりやすい、筆が滲みるように。

水辺をひとりで歩いていた。ここに池はない。知らない鳥をまた見かける。昨日、男の夢を見た。今、記憶と書物が、名を読むよ。

火を愛しむ

池田　康

崇めるは赤
紘を打つ燧

真夜の真闇の大玄宮の中
魂の凍傷にふるえるとき
夢みる三千丈三千紘の彩

真夜は孤独
真夜は氷る獄
真夜の冴えは天空
はるかかなたの静寂に
すべてのものを音階と聴く

ねずみ野ねずみドブねずみ実験ねずみ眠る
松欅棕櫚すみれドクダミなずな白詰草眠る
チョモランマの岩死海の泥サハラの砂眠る
真夜の真洞の中央祭壇
地図も時刻表も百科事典も六法全書も無効
仁義礼も算盤も取扱説明書も歳時記も失効
すべての言葉は譫言となり理を決壊させる

真夜は無時間
名前も理由もない
真夜は魔術
全能の夢遊の黒衣
真夜は世界音

真夜中に聴く彩の諧調は
どんな酒よりも麗にして
稀覯の佳韻　木霊の帰還

存在の芯が吃る
非在の火が歌う